

三
文
石
砥
青
筆
刀

~ 13
3573
3



門 13
 號 3573
 卷 3



青砥石文鸞水箴語卷之二

江隱 洛客

曲亭主人筆削
 標亭琴魚原稿



つらや

第三套 鴨河の涼床 清水の遺扇

劇齋の三條の客店と宿小あつち遊山翫水懸念せど逗苗の雜費を厭ふ
 住宅求むるもの只管は思ひ小室八の大和あり五條そりの人氏小く
 異は且く京小もどり當時放蕩なり左は左右の死のわらふを此所縁と
 心あつち紀の藤白へ赴ぬる劇齋は隨後をり死あり今も都小聊渠が
 相識ありけりはどぶとの友媒姉と鴨河の西堤小賣家ありと告ぐ劇齋ハ

早稲田 大学 図書館
 題 34.6.3 雙
 藏 書

蜜ハとぬく。い。あつた。住宅の價も亦廉くはれ。立地は倅成て主従三人
 移住たり。米薪をど買たる中のみか蜜は任して劇齋を。芳めて適汝が家の
 惟光とを稱する。この家大厦はわねども玄関あり。客房あり。便室あり。子舎あり。
 矮樓の夏を旨とて。あも坐敷を三間より。うの。数奇人の住捨。う。外
 面は黒板板塀して。左右より折遠の。東面は衡門あり。二丈許退却して。砂
 布。小庭あり。吳竹と六七竿。庭下。植する。王子猷が。あへ。と。徳。あ。欽。
 兩株の松と。軒端近く栽する。陶隱居が。閑雅は。做。ひ。吹。雨。漏。り。く。斑。に
 深る。網代天井と。向。上。れ。彼。此。は。幾。と。く。平。張。著。壁。錢。の。鬼。道。を。捕。り。く。
 氷魚は。似。う。水。縮。く。半。涸。る。泊。石。の。水。盤。を。直。下。せ。底。も。ぬ。え。を。流。蝨。と。

122

化生一。蛭。蟻。の。囊。斷。離。茶。敷。の。如。し。か。て。座。敷。と。ん。え。れ。壁。は。剥。き。色。紙。の
 迹。の。方。寸。の。中。か。厚。新。あり。画。れる。花。紅。葉。の。隔。亮。と。共。色。衰。へ。削。り。く。る。杉
 檜。の。真。柱。の。数。々。立。り。九。尺。の。浴。室。は。居。風。炉。柄。の。蓮。綬。一。間。の。雪。隠。小。板
 金剛の端緒絶する。物大く。ゆり。これ。も。具。足。ら。び。と。の。ゆ。と。や。只。これ。の。こ
 中。あ。ら。う。り。櫃。階。子。を。攀。登。り。く。矮。樓。の。欄。小。身。を。倚。を。れ。東。山。優。小
 連。り。く。累。る。笠。は。燦。り。鴨。水。長。く。流。ま。く。結。ぶ。帯。の。如。し。四。條。五。條。は
 橋の上往方来方の道。俗男女への樓上の人を管待。只この眺小充る。
 欲とあふむりの好景。わが蕃山。繁山の。視。熟。る。田。舎。人。の。彼。仙。窟。は。馬。を
 繫。於。桃。源。は。還。る。と。と。忘。れ。ぬ。心。地。や。あ。ん。劇。齋。ハ。る。物。毎。は。新。あ。く。と。

書石石文卷二

121

多もあれば今この山水人物は暫時俗腸を洗れて奇也々々と賞葉をかく
 その次の日より工匠四五人を召聚合門の柱根を継ぐ板菅の屋棟を掩着
 母屋を菅更席薦を刺改塚と塗り石を洗しその若一時は見るといふ
 して踊るうけん一見堂といふ扁額を玄関に打つる傷亦壁書して乞菜の
 人々毎旦巳時を限とこれを過れば主人在宿せど遅れれぬの憾ること
 あり来訪と診を乞んと欲する病人は多く牌を獲て進退志し次第を追
 りて乱雑せば敢茶劑を興とて病架のく来診を乞んと欲せば轎子を
 迎へて送迎の等閑は只是病架の不信はあり不信仰のものを療へて云と
 写るるればどの居宅の光景をぬめぬ弥ましく人みかんとらざるにありぬ

かの劇齋奸智あり疎く巧しむる竊は蜜入らるるをゆきく男女を
 えりも度被此の貧人を備ひて乞菜見は打扮して或ハ十人十五人朝毎に
 聚合するその備りも各差あり半時床几は尻をうけ調劑を俟賽
 されば一朝の足幾十銭一時をれば増し幾銭未明より来て牌を取り玄関に
 聚合のりも當座の運速備短よりくとの貸銭を取らせれば皆歡ひて
 来ざるはく老るは杖を携り幼は背を負ひ門前をぐる市の如し
 かく又巳の日に竊は備ゆる轎夫は病架あり轎子を迎ふと偽せし
 劇齋これより来つ日毎に洛中洛外をめぐりけ早走しく日を消し夜の
 更に還らざこの夥る備夫の口を甜く厚く賂ひ竊は誨て云といふ

あのもども流言（まこと）として此度紀路より上りぬる一見堂劇齋（げんざい）の未曾有の
 名醫あり。傷寒中風ハ物の数ナシ。如此々々の難産難症痼癩病頭痼狂疾
 廣死都の医師達みか匙（さし）と捨（す）りて立地（たてぢ）は治（ち）りてこれハ天飛（あまと）が雀首（すずな）の
 愈地（いよぢ）と改（か）ふ。塞見（さいけん）も起（おこ）るにや。その虚説（きよせつ）わづね（ね）は朝毎（あさごと）は処（お）せ（せ）ば（ば）乞（こ）茶（ちや）
 奴夥（やつら）一巳（いつし）の比（ひ）より轎子（こし）も迎（むか）はれ（れ）ておあ（あ）は日暮（ひくれ）ね（ね）が還（か）り（り）ぬ（ぬ）る（る）者（もの）皆（みな）倭（やまと）島（しま）の
 後身（ごみ）法（ほう）茶（ちや）所（じよ）と（と）これ（これ）を（を）い（い）ん（ん）病（びやう）煩（わづら）ぬ（ぬ）命（いのち）惜（おぼ）く（く）ハ（ハ）只（ただ）この（この）名（な）医（い）を（を）頼（たの）む
 べしと謀（ま）き（き）し（し）ひ（ひ）徇（こ）ら（ら）劇（げん）齋（ざい）亦（また）洛（らく）中（ちゆう）中（ちゆう）く（く）あ（あ）る（る）べき（べき）茶（ちや）店（てん）より（より）茶（ちや）種（しゆ）を（を）
 ぐ（ぐ）と（と）召（め）す（す）日（にち）毎（ごと）は（は）買（か）入（い）る（る）と（と）あ（あ）る（る）が（が）これ（これ）を（を）彼（か）此（こ）は（は）噂（うわさ）し（し）て（て）の（の）名（な）を（を）
 せえ（せ）り（り）耳（みみ）と（と）責（せ）び（び）目（め）を（を）賤（せん）し（し）新（しん）子（し）走（し）り（り）奇（き）と（と）好（この）む（む）あ（あ）る（る）焼（や）滴（てい）の（の）習（しゆ）俗（ぶく）

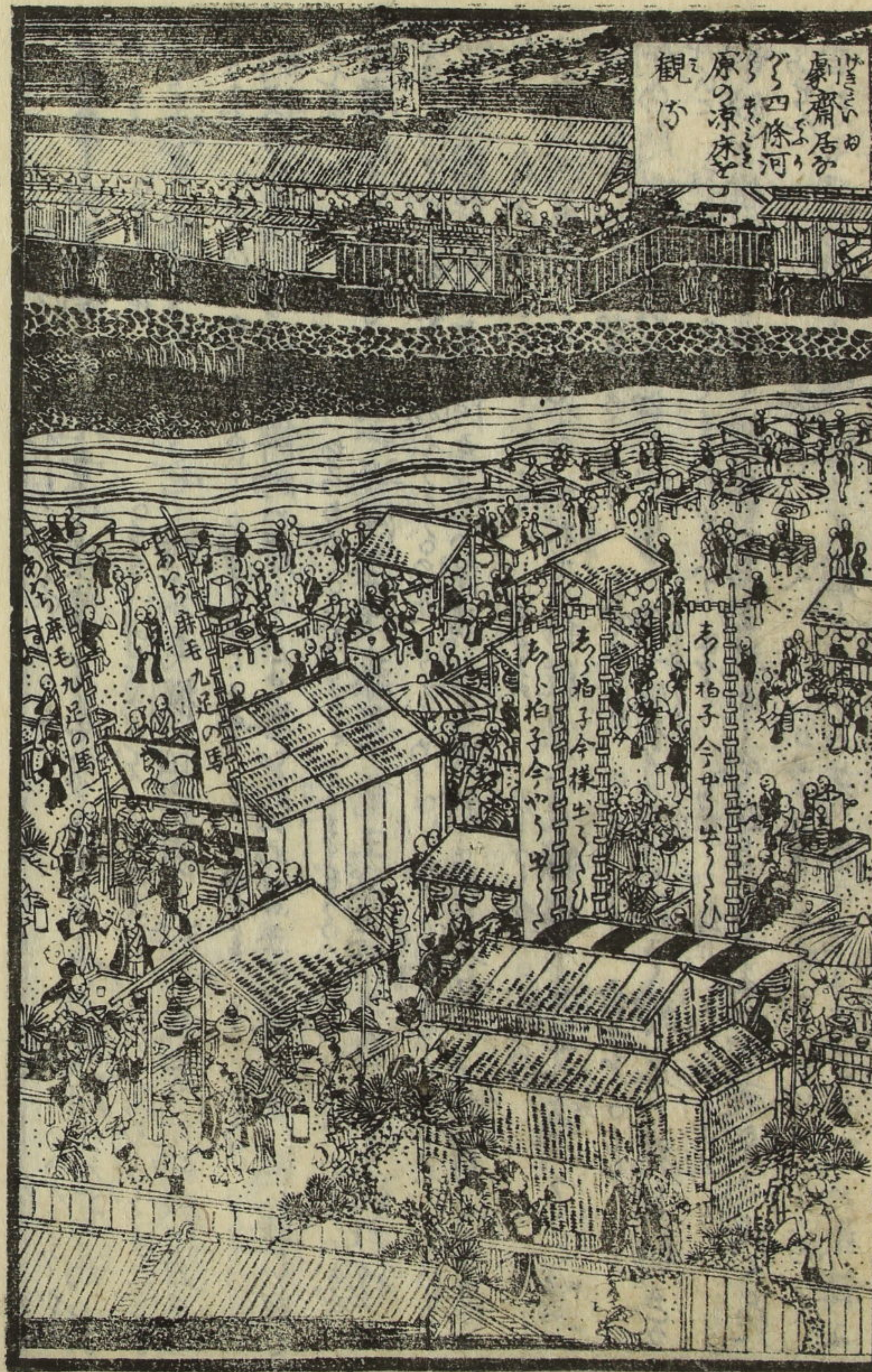
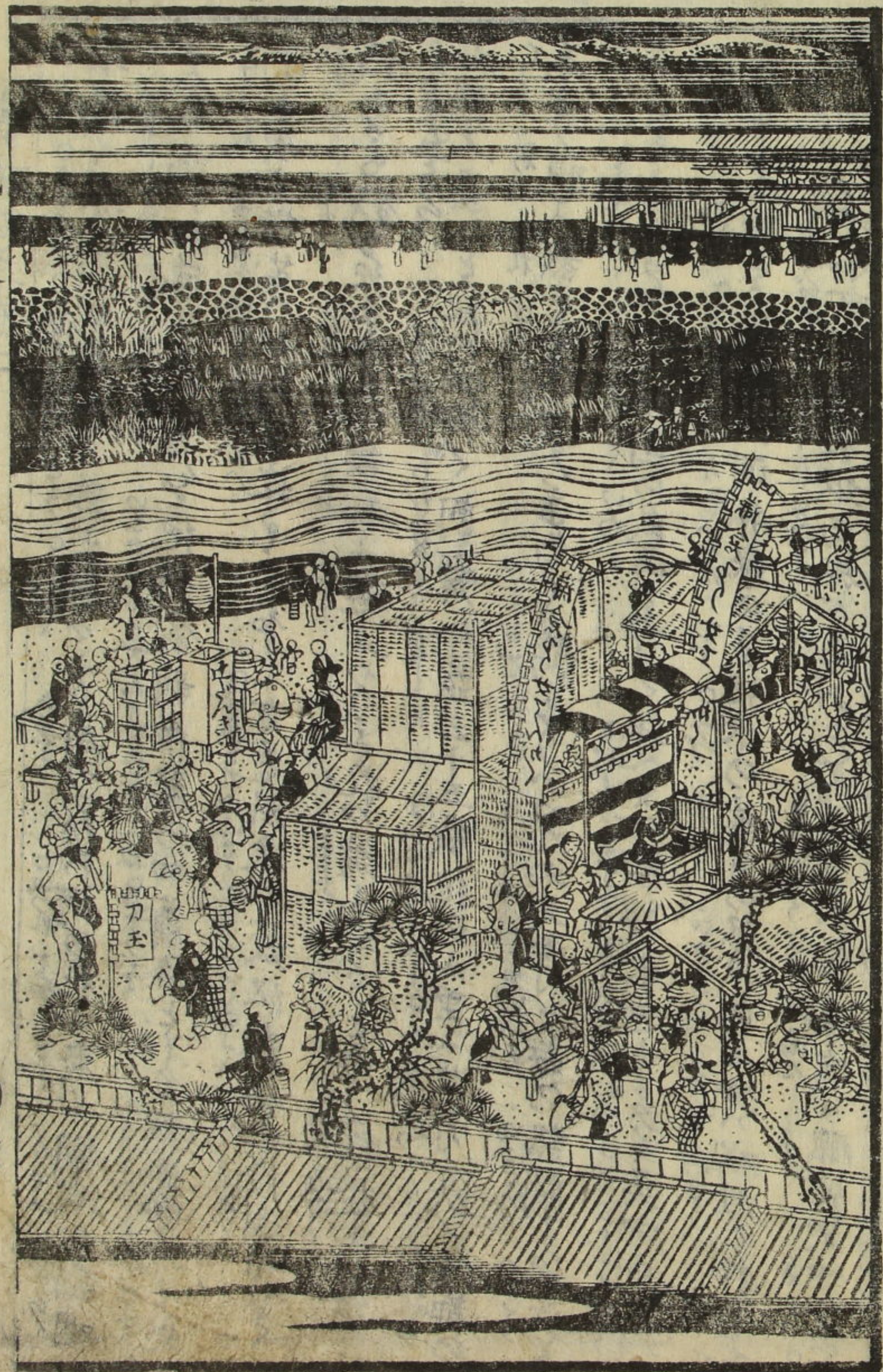
かれハ是（こ）れ（れ）より（より）あ（あ）る（る）劇（げん）齋（ざい）ハ（ハ）療（りやう）治（ぢ）を（を）乞（こ）ふ（ふ）の（の）少（せう）く（く）ハ（ハ）僅（つ）よ（よ）下（げ）月（げつ）を（を）り（り）に
 ち（ち）き（き）今（いま）ハ（ハ）人（ひと）を（を）備（ひ）ふ（ふ）と（と）も（も）真（ま）の（の）茶（ちや）奴（やつら）と（と）多（た）く（く）轎（こし）子（し）を（を）り（り）迎（むか）ひ（ひ）て（て）日（にち）
 と（と）く（く）間（ま）断（だん）あり（り）る（る）意（い）を（を）初（はつ）の（の）奸（けん）計（けい）ハ（ハ）尤（な）憎（にく）む（む）堪（た）ら（ら）ぬ（ぬ）も（も）其（その）匙（さし）ハ（ハ）拙（せつ）
 くと（と）且（かつ）時（とき）運（うん）ぬ（ぬ）叶（か）ひ（ひ）ら（ら）ぬ（ぬ）大（だい）病（びやう）難（なん）症（しやう）一（いつ）人（ひと）と（と）く（く）瘡（かさ）ら（ら）ぬ（ぬ）と（と）い（い）ふ（ふ）が（が）これ（これ）ハ
 只是（こ）神（しん）医（い）と（と）稱（せう）賛（さん）せ（せ）ぬ（ぬ）利（り）を（を）射（い）て（て）大（だい）く（く）か（か）た（た）れ（れ）ぬ（ぬ）も（も）左（さ）右（う）小（せう）各（かく）番（ばん）の
 癖（くせ）耗（こう）せ（せ）ぬ（ぬ）密（みつ）八（はち）且（かつ）蔵（ざう）ホ（ほ）外（がい）ハ（ハ）一（いつ）僕（ぼく）ご（ご）増（ま）え（え）ぬ（ぬ）財（さい）入（い）る（る）と（と）多（た）く（く）ハ（ハ）諸（しよ）雜（ざ）費（ひ）ハ
 の（の）く（く）寡（か）劇（げん）齋（ざい）ハ（ハ）既（すで）に（に）斯（かく）の（の）ま（ま）掃（はき）得（と）つ（つ）微（ゐ）妙（めう）く（く）と（と）都（みやこ）へ（へ）と（と）書（か）
 ころ（ろ）ハ（ハ）高（かう）運（うん）よ（よ）る（る）物（もの）々（々）併（へい）蜜（みつ）ハ（ハ）働（はたら）け（け）ぬ（ぬ）太（た）く（く）り（り）ぬ（ぬ）多（た）ハ（ハ）渠（みち）と（と）親（おん）愛（あい）と（と）
 配（はい）劑（じ）の（の）副（ふ）と（と）是（こ）藏（ざう）ハ（ハ）疎（そ）れ（れ）く（く）薪（しん）水（すい）の（の）更（ま）を（を）掌（て）す（す）も（も）その（その）性（しやう）老（らう）實（じつ）あり（り）ぬ（ぬ）ハ

一毫も媚しとせむこの両僕の行状蜜ハハ口オあり書と讀むと好
 後ハ医師はあぶき人ぐらなつねを便佞ゆきく媚もバ劇齋をこれと
 愛しくとの私あつとほあつと且藏ハ言寡く主人の為ハ勞を告ぐ書と讀
 とも嗜しハ務べたてと勉果く素讀を習せむ夜ハ稀あり世オ此ハ
 似これども醫事ハハ伶俐く發明せしと多々れども意中ハ秘てあつ
 負ハ大凡その勤態密ハハ劇齋が是方処ハ骨と折リ且藏ハ劇齋が
 是方処を疎せむ費と省き関を補ひあつ忠心とく仕せども
 うち甲しとちとつれが劇齋とこととあつて蜜ハハハといふ方好と
 ちひさうとくく程ハ六月中辭ハありハ名々も鴨河の納涼床いと

やまの熱開ハ一見堂の矮樓あり居あつちやとみを觀つべ一金馬西山よ
 入る比より処陝まを掛もを種々の勾欄ハ田樂舞々獅子舞あり祀師放下刀玉の
 刺技あり足引の山猫俣師ハ鼠木戸を客と留め黒玉の警入角觥ハ腰と燃て
 按摩のまわり奇と傳ハ近於海俣藤太が竜玉城ハ硝子の細工ハ頭レ後ハ
 耽る外國態秦始皇が阿房宮ハ團機関の眼鏡ハ妙人又人ハ立籠る息ハ
 吹れハ河風温く水又水の堰れてハ沙乾き足蹴熱ハ昆布とみつとくハ
 何の所以と某の娘をと称するハ必土坡あり月ハ浮や嫖客ハ花と飾する
 歌妓と携り流ハ歌ハ醉翁ハ石を枕中とて臥とも羊ハ似せ醒來く湯とた
 香煎も足らぬとて遊過く餓さるハ蕎麥の店ハ走る生洲ハ酒樓ハ

青砥石文巻二

四



けいせい
居か
四條河
原の涼床
観
ふ

青石文巻

五

劇齋が宿所近く年来寡居して彼此ある人の衣と解洗をどく幽世
 渡るものせありたるありて劇齋主従も月比衣を刺せり洗しもせれば疎
 媚くもの脣の薄く老女おれが劇齋へ是を言葉敵はせんとあわねど
 世上の風姿を問んとあつて暇あり来るとあれが獨酌の敵もかく四表衣と
 語せり。かくこの日異社婆々へ来て来ぬ。祇包の所結と解くにて劇齋が
 ほろふさうよせ縁て誂せあひ不斷衣を綿入れはく。あつて来りし心おれ
 のと備わと世話をもつて頂日の日の短と約束は後れぬと許せあへり
 劇齋はこれとあひさし小領の著るまを褌の揚がまめせと飲と置
 衣とあ披け衣の間は肩あり討げは披けくると清水の舞臺とてさ

遺せ琉球扇ありこのあつてむらあつての故を訊とバ異社へ黒く斑の毒を
 見しうら笑ひとの初より音まるとあひさしに物は終れて忘れぬりぬる比
 ありま宿は一個の女中客の侍の渠の婆がひびく脱れ死筋あまバ給事に
 比より町の炊妻は遣へ今茲は半季の定りあれこれえは退糧してぬるはり
 宿まどりかくて件の子とも身の落著と侍ととこの六清水の觀世音へ詣に
 云云ののむより彼女中多ひひきやう并とうち折ぬその時女見はこの扇を拾ひて
 きて来つ云云と告るよかへんるよ平く認る大人のの別へあひの角ハ都の
 名物ゆき御影堂の名ハ高れどもかくの如れば生平はえを曩よりせあひ

丸吾俯が訊あせせしよあを琉球の扇と答あひしよありてあまり。細紙と
 中ん金泥と中ん山水を画たるその骨も尋中あねが紛れあてくもあはり。
 ありて返しあわらる受あめあめひねと忠あてく告るよあん劇齋羞く顔を拊
 原來そのの両個の女子の客と女見あり一決あられまば隠まよよ
 ありてあれ謬て舞臺よりこの扇を落せしるバ件の女子の珠瑁の弁を打折り
 ぬた。勸解んとあへどぬも識らぬ。あは女子は幼あく物いんハさだぐあて。
 扇まらうち捨くをあても其処を避うた。昔あは彼弁ハ價貴た物
 のなきよ面あはるをあてる。これとく續せよう。あひつ腰着の小袋
 あり。碎銀一顆撈り紙拵まき與るを異杜ハ受む微咲て物体あはる

ああか彼弁を續うと何ホの費うはるべき日よあ陰を蒙るりのこと
 賜りて可らんやと推辞ハ劇齋頭をうち掉り弁の續料よ受どとあてこの扇を
 されよ返せし祝美よ取のせん推辞れての面な一枉く受と勸あてまて
 宣ふ物あれば且く預りなると心て取ての兒く懐へ扱わたり劇齋やう
 心あはる、扱も件の女客ハうあ方まへあてんとて給事の望し兒年才
 幾ど何国のものど名ハ何とあてらん時宜あふ給事の汲引する玉あ
 べし明々地は知らせよう。と問ふ底意を猜しん異杜ハ頭小藤を進めを
 早よりのうまはり彼女中の舊里ハ如此々あああれども所縁よ就く都上
 年才ハ廿二四はあん名ハ阿傑とあはれたり。えをあひどく標致の人あてに

青砥石巻二

六

提れるる走書いと愛く不ぬま更も拙くたさるべき家の奥がもといはせむも
 恥くくねと過世まうくくやまも二親を喪ひた胞兄弟もく憑くた親類の
 侍孫が良人のんと欲されども遣嫁の支度整ふも又措紳へ拾事にしぬんと
 欲されども規式の衣よる支えり然と町の下女をど薪水を愛る人ぐりぬた。
 ありと吾侍も術あるも且身皮の整ふもといひひく声と潜り有得人の
 妻よわれくと勸め侍もどをあらは羞て兼引む志づく勸め侍りくくバや
 屋くは黒頭あうらな不さくの望あり縦有得の家ありとも正妻あつた
 よはまぬくドとの正妻も物を替るせ成へくく妬れて辛死ぬとんバ悲くる
 べし又その正妻あつたどもいく老るるくくはまぬくド五六十も及べ人の

けりまぬく存命ぬき吾侍ありてい程あり身まうりあやうあうバ只まが
 所為と人みまいんそハ腹まうりたうあえく又雲の上入物のいひぬ進止まうくふ
 規式ありとを愛くるもむむも熟むとてまぬかひく笑まんこれも亦憂とあう
 べしされど月もも花もも志もあうたく只小廝の遣使商人あへん
 望しうく年の齡へ三十あまり武家あうた又商人あうた或ハ醫師吹樂隱居飲
 傍輩もあう妻もあうた家中あうた拾銀の多少と問を仕へせんさうた薦
 とも諾くくといひ侍りか望の多うれが身の落著の遅かも理りよ侍りか
 よの女子は稀あり律美人といふた飲その性伶俐故あうたかうりの妻ハ鏡
 鞋で索ねても二人といふくあうんあうハ可愛れぬ中をとさうた報る善巧方便

劇齋の世尊龍華の説法より愛く覺て頭より耳と側つて心動な
 けし六いんとするまひひくして。悉く四下とんくつて笑む目と共を声を細うし。
 ちりちり如くまね妻や夜の物の揚ちり衣の出納厨の費もまぐ不自由なれ
 ども都の御旅が皆縁のうわぐは且く措て懸念せだ側室を使へども。
 さる給事ほもの浮氣めり利するもの世帯を任せりるへと思量りて
 黙せり。あつふふとの阿磔とゆんまが注文は甚協入りとてもかても筋の給事
 せんちりかまが方へ来あれと潜め問を突果て異杜へ満面ち微笑原来
 さるにちりのとりまを便宜なれ。かう疎くもまは知りぬ大人の浮きも
 なくて情あつてえあふ況時め来まへば被子が頭かあらかん。これとい

推辞んや清水の観音詣は被子の并を損へり大人は失ひぬ。その角の再び
 返るも山傳の端またりあうぬ方へあをせぬ。その尻のむ著ま心なり
 ゆるんは被子の幸のむだ吾儕も亦後をとりとるども不定のむあつて
 点頭せ翌も吉日はゆりかへ見まへ入れらん復飽まよえぬ。いふはあふ
 稱のせぬ。直に苗やあをもけうらあふと密語バ劇齋頻まも領たこの面
 影ののめり心操へ今まの再びん事成り當入る承引ハ翌々れは必
 づり来よ辛苦銭の如此々取えとの餘のうの箇様々と耳と取りり相譚
 へハ異杜のちあふ果て劇齋が脱り衣と置て祇ち被け告別してあけり

第四套

妾の初見参

醫の鹿鳴立



小治政の世

十一



いりおれき
異杜阿磔
と
けねさき
康耐子薦む

青砥石文卷三

十一

つぐひげんさい。ひんりや
 この次の日劇齋の竊はあらまわれぬ午ありゆく彼此ある病加と大々こ
 うち廻り下捕は還るとぞて且蔵は分付る些の報を調へ便室の次の
 房あり子舎ゆく青銭学士張鷹が遊仙窟を讀ながら酒うち喫く
 てる程は黄昏わくなりまろり浩処は外は咳く隔亮を徐と閑の
 ありとえんばこれ異杜あり莞然とうち笑つほろり近う来て声を密に
 きのひ宣へせし趣を彼女中よと示してとゆかやう点頭せらふあんと
 ありまあり馳く曆をえをせし中段へ取るとあふ下段は月徳母倉とあふ
 よろづよた日はゆるうう約束と違へたとそとそとて来りあふ商いあ
 りととバ劇齋領たくとあふくとて来てまると召入れをのそぐせば。

異杜へ馳く退却の誘引立てを進をるかくて阿磔へ引く随小老水と
 肩より片明り熱ぬ出居の窓の戸も立ちあがり鮮衣の留奇南と先へ熏
 りと踊る敷居の溝川もさそふ水あり初見参りの珍し死冬枯よ一花
 咲る姫百合の俯くも亦風情あり當下あふ劇齋へ所居不犯の桑門が如來
 慈雲の来迎を今眼前拜むとぞ隨喜の涙を沃ぐまよ頭を拳眼を細うし
 熟視ればの日は清水の舞臺を偷見しあふ八音すまふ衣の綺羅を盡
 さいども京様わづらと物あり解は文中も餘るへ死黒髪の花沢やあふ鬢の
 ぞくも鬢の取ま花もわづらと趣あり髮際の高きは似る項筋の雪あり白
 顔へ秋月も妬むべく腰へ春柳も羞べし惜や肩を刺れどその迹の青空あり。

この盃の河あり。この場へ阿磔を取。又別盃ととり。揚て異社より。
 浮らぬ。且笑ひ且樂む程。日ハ暮。且蔵ハ行灯を掲。密ハ老
 燭を添れど。劇齋をえん。酒宴ハ時を移。これつひと
 酔ハ勝で。腕を枕。臥。當下異社ハ目を注。霎時阿磔ハ耳
 語。俱ハ盃盤をとり。納。庖。赴。弟。子。局。と。観。阿磔と
 密ハ且蔵ハ引見。な。寝。の。鐘。の。音。ハ。異。社。ハ。耳。を。歌。て
 され。更。初。れ。誘。と。阿磔を。立。又。子。舎。へ。赴。の。案。内。を
 知り。負。便。室。の。戸。棚。推。開。と。如。此。々。と。臥。被。み。布。と。物。
 戸。と。棚。の。隅。より。索。せ。客。枕。見。身。今。宵。ハ。心。と。逸。与。を。阿磔ハ。受

取。て。懐。紙。と。ち。被。れ。都。の。富。士。降。雪。の。似。て。對。ぬ。う。ひ。く。衣。脱
 更。ん。と。立。程。ハ。異。社。ハ。退。き。と。告。別。と。宿。所。へ。還。り。け。り。
 か。と。阿磔ハ。醉。臥。せ。い。の。ほ。り。と。立。り。と。夜。の。深。く。御。寢
 たり。密。や。密。や。と。密。や。と。呼。覚。され。劇。齋。ハ。狸。睡。を。猫。拍。音。ハ。兩
 三。声。呼。せ。心。と。答。と。起。腕。を。捺。り。左。右。と。異。社。ハ。退。り。伏
 別の。程。ハ。熟。睡。し。ん。れ。鈍。ま。た。と。ひ。み。く。立。夜。燈。運。歩。
 現。定。め。心。き。の。飽。利。ハ。耽。り。香。ハ。解。ひ。色。ハ。倒。と。を。
 あ。抱。苗。と。扶。け。臥。房。ハ。入。れ。劇。齋。ハ。あ。の
 夜。阿磔。を。留。め。十。襲。秘。藏。珠。玉。の。如。く。現。劇。齋。と。の。来。色。を

このま 好ぶるもの真は好ぶるにあらずその身紀の山家は生れて終三十餘るまで色相
 無量の美醜を知らば且家貧しく足らぬものあるその性慳しく吝るもの顔
 名利の餓鬼とありて富と羨むの外ありたかしくその兄ありる湯治が遺
 財を獲くもの足らぬとて遂に京に去りて富饒にあり入既
 富饒あるが快樂を求て年と損も且その樂ハ真の樂にあらず外あり求て
 慾は充財物と多ればいふ貪りて止まぬもの性吝るものハ必嗜慾多と
 大く妻妾の爲に驕り是小人の心ありかる故に聖語は驕且吝とて驕る
 もの心賤く吝るもの必驕り劇齋素ありる人これこれ今この美
 妾を獲く酔後の水は異ありて一時の慾は稱へば快くもその身の

仇 況阿磔が美のど淫痴郎を湯をオわりて
 劇齋が氣質とありあどりて節約の陽の費を省くが
 如く家事は心を用ひてその意は協するとかや且蜜ハホを勤て
 りその失あるに竊に諫く爲に隠し又勤るとありて誓てわだに告ぐ
 とやこの故に蜜ハ阿磔は媚て誓を求め與ふもの唱く敢て名を
 呼ぶとて阿磔亦の程なく家事を阿磔に任せしむる權あり
 渠は歸して正妻は異ありて独且藏の初よりそれのひでい
 受ども諫く用らぬにわだが勤むるを陰陽を勤果れは退
 夜学とての絶く阿磔は諛く況敬とてや嗟嘆のあり折るた

わがいよ諷諫とこれが劇齋還これと怒りといふ且蔵と疎とさる程小
 おれが家事と執る及びて下女あてへ不便ありと劇齋又異社と召てあの
 りと相譚少は恰好この婆々が女見あ宿所は在りその名と匙と呼とて十六
 歳はわたりあを清水寺の舞臺の下中劇齋が琉球扇と拾うりの小
 むん異社ハ件の匙と薦めくもの炊爨遣つ阿磔ハ豫く相識るも大く
 わりて歡びて懇に勅使へが匙も亦歡びてその指揮と稟するとあく奥のとの
 唱へられればや阿磔ハ匙と使ふ及びて大約酒食の餘もあれ齋と異社
 贈遣し衣裳の舊て且蔽るあれ齋と異社ハ贈遣し私の錢あれバ
 異社が来るを待つけく竊は取らんとせしむ異社ハこれ彼は徳つなぐ微妙さ

ふと地りや。されバ古語よとわり老圃はあふれが圃と問ふとかなり色。
 街妻も又如此あり。媒婆あふれバくとの趣と尽はてあく異社を豫く
 劇齋が氣質とよくあつるものく阿磔はその意とゆさく衣裳
 結髪化粧は迄初ハまきく花もよせどもかくとハ人かなれど衣縫ふまき
 ちる尻頃後ハ習初ハの糸ヤの技ハ至りて渠が得意の藝かれどもその
 ちく蕙く衣ぬきとよくはとて現彼妻がゆきと、劇齋の氣をさく
 家事と任用せられハ異社が謀はよすると下は家の権を執りハあめが
 隨意せらるるとあく家事ハ暇あられバと衣ぬきの舊の如く異社許遣
 く洗せり縫せを阿磔がみづくると下は毎の化粧と結髪のと

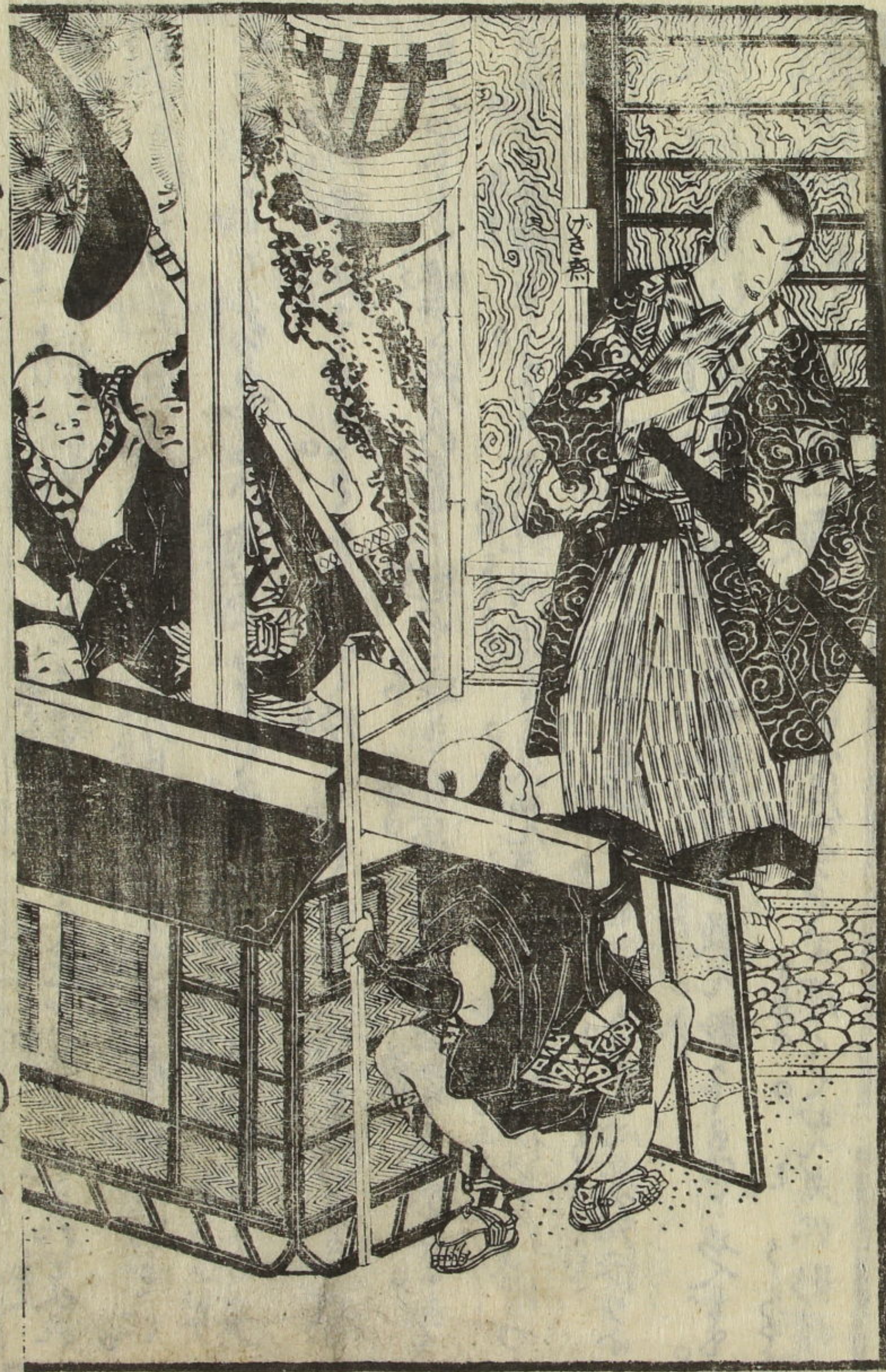
青砥石文巻三

それも多くなり匙は梳せ或は女葺頭といふものは倍々せつゝあつた人の使へ
 ども私の恩と被けり物と恵まらば蜜八匙ハこれが為は奔走
 せむといふをあり加旗あつた人も衣裳と欲しく流行と好む酒食の
 うも修るに多かりその費亦くわねど劇齋既は惑溺し、替の如く
 聾の如くまゝ阿婆がせむるも一毫もあらずとせを連渠へ家事
 かも才ありかれがま苗守後をせしと憑くあつた人も既にかつた人の
 この住居ハ不陟りもた家もあつと求める程は次の年の春の比富小路ハ
 賣家あり其処ハ間敷も廣く土蔵もあつたりやぐ家を買替つ
 富小路へ移徙し療治の如く繁昌せりかぐ今茲は春過ぎ夏もや北水

求る六月の中浣はあり一日劇齋ハ且蔵と召てのりまが藤白の家を
 莊園へ曩は里人預措つた去歳の秋の収納減少しつたゆゑの約束違ふは
 今更彼地は赴秋の季まで逗留しとあつた豊凶を檢て今茲の収納は
 去歳の未進より立は蜜八と遣人とせんとせむるやなつた便中
 是紀伊国人あり彼里人より私して律忽はまゝ道中ハ浪花より水行を
 進まば路費輕く彼地は逗留日と歴ると糧も外は物も田舎よりい
 ちの錢を費はさず日敷と計り路費を與ん但儉約と宗とてとせむ
 賄之ハ明朝未明は發足せよと嚴まあつとゆゑ此の路費を取せりや
 且蔵ハ一議も及ばず猛り起行の準備しつた詰且疾起りやとせむ他の

れ。納と。網戸と。鏝し。土戸を。圍し。隙塗と。いふ。う。え。う。く。鍵。ハ。日。が。臂。近。寄。り。行李。ハ。納。り。あ。ら。は。る。程。ハ。首。途。ハ。も。如。翌。と。い。ふ。その。夜。より。阿。摩。羅。を。殺。種。々。め。し。と。留。別。の。盃。と。勸。め。る。劇。齋。ハ。快。愉。ハ。酒。う。ち。喫。く。と。い。ふ。や。う。に。此。度。ま。れ。西。国。へ。赴。た。く。と。あ。く。ハ。二。十。月。遅。く。ハ。冬。の。ち。の。あ。ら。は。る。で。還。り。こ。う。う。ん。致。量。り。が。こ。う。と。や。こ。う。と。家。ハ。来。て。假。初。め。る。兩。年。ハ。あ。ら。は。り。家。の。う。ら。ま。く。頭。ハ。心。の。と。あ。ら。は。る。あ。わ。ぬ。と。猶。ま。く。心。と。用。ひ。ま。か。ら。る。の。あ。り。と。知。ら。は。る。と。せ。る。殺。中。々。立。ど。も。且。蔵。と。も。か。く。と。故。郷。へ。遣。る。事。ハ。此。度。の。行。ハ。六。波。羅。殿。あり。從。者。と。謀。ま。せ。ま。せ。も。こ。う。一。僕。ご。も。具。せ。ど。く。身。ひ。と。あ。ら。は。ん。ハ。面。あ。せ。や。く。且。使。め。た。と。い。ふ。ご。う。ご。う。と。密。ハ。と。轡。添。の。若。黨。ハ。く。お。て。邁。こ。

苗。守。ハ。僕。僮。の。な。ま。れ。ば。と。心。も。あ。ぬ。備。人。も。く。と。あ。ら。は。る。謀。置。べ。く。の。わ。た。た。と。あ。ら。は。る。心。細。く。と。も。匙。あ。ら。は。る。慰。め。も。せん。人。と。用。ひ。め。た。ら。は。る。あ。ら。は。る。異。社。と。備。か。く。使。ひ。ま。か。ら。る。後。安。た。ら。は。る。又。土。蔵。と。固。く。鎖。し。と。鍵。と。行。り。李。ハ。納。ら。は。る。と。あ。ら。は。る。疑。み。故。め。ら。は。る。只。その。心。と。休。ん。為。の。と。苗。守。ハ。不。自由。せ。よ。と。あ。ら。は。る。浪。領。置。ら。る。銀。あ。ら。は。る。何。よ。あ。ら。は。る。用。ひ。ま。か。ら。る。昼。寐。さ。ら。と。夜。い。と。く。背。門。ハ。昼。も。開。く。ゆ。で。よ。れ。今。奉。平。の。忝。さ。ハ。四。海。静。謐。中。々。盜。賊。稀。と。い。ふ。が。と。由。断。ハ。是。大。敵。ハ。只。用。心。ハ。あ。ら。は。る。の。中。ハ。ま。れ。ハ。他。郷。の。め。あ。ら。は。る。都。の。老。醫。と。肩。と。比。べ。く。刺。か。ら。る。お。ん。撰。ハ。遇。へ。り。面。目。既。ハ。身。ハ。餘。ま。か。ら。る。他。の。婿。も。と。あ。ら。は。る。人。都。ハ。病。架。の。外。の。ま。と。親。ハ。友。の。あ。ら。は。る。人。と。あ。ら。は。る。と。せん。



大座

大座



徵聘
おつて
けきこの
劇齋
らんせいの
鎮西へ
行く

青砥石丸巻二

大座

びんご。まれのしは背くとも人よりこれと欺んやまを心鬼かしてこれと人れ
 笑せまひを俟たえしは似たれども過る月日、と速ううりたれどもあつとに。
 かへり来る日とあちとといひ論せどもよか小惜む別入亭環のうり言も亦多
 うれ阿磔ハ涙さうごともよくあちゆきゆき。さういふ人、とこれかき残る
 暑ハいさく堪ぐ死のあは途と遠き旅宿ハおん身と愛しあひてよあ
 中々主の親類ハくさるハ親同胞ナリ。只死んがとのと天地と仰ぎ、俯つ
 憑むのよや要時の別ありとも何とまはる慰むべきよは心憂死限り小
 ぼれど人の羨む此度の行を歡びしとこれのさう歎ん歎んものとも人ども
 脆死ハ袖の露よとさう傷ハ僕僮の死ハあつくは潔くておん刃に影護

くら。あをせり人ハ且蔵ガ紀の路へおたハ幸ハなり。初見参のその日
 あり添臥せぬ夜ハあり。よいを悲しれ秋三月ひとり守ハ夜ともよ。
 長死寤寐とつふと明く。つらんとお声口隠て目と拭ハ劇齋ハ
 胃塞りて又おりもあつと。かくその詰且劇齋ハ大カ野袴まで行装倚羅
 ちん入と逢くと侯程ハ外面ハ馬嘶死ハ夥来ぬ音と同行の案内とこれハを
 とそと違くと立ちこれとつハ行轡より来れが善黨密ハハと六波羅
 あり録られ。後者九廿餘人執長刀ハ茶箱雨皮箆奴草鞋奴先ハ立又様
 後ハ小荷駄の鈴もさう推明との門前陝と西と投てど起行る。
 刀筆青砥石文鸞水箴語卷之二終

